

## 坂東祐大／咲くやこの花インタビューvol. 44

坂東祐大(ばんどう・ゆうた)【令和5年度 音楽部門 [現代音楽]】



### 今、この社会に何を投げかけるべきか 新進気鋭の現代音楽家が生み出す音とは

オーケストラや室内楽、邦楽器の作曲にとどまらず、映画やドラマなど映像音楽の製作、サウンド・インスタレーションなど、ジャンルの枠にとらわれない創作活動を展開している現代音楽家の坂東祐大さん。

「2022年には、初の作品集『TRANCE/花火』をリリースしたほか、自身の近作のみを集めたコンサート『耳と、目と、毒を使って』を開催し、ますます勢いに乗っている。「難解なもの」として敬遠されがちな現代音楽を広く届ける存在として、大阪の文化振興に大いに寄与することが期待される」との理由から令和5年度咲くやこの花賞「音楽部門」を受賞した坂東さんに、音楽への向き合い方などを聞きました。

取材・文／岩本和子

## 現代音楽家の道は「はめられて」始まった!?

このたびはおめでとうございます。

ありがとうございます。

受賞のお知らせを受けてのご感想を教えてください。

生まれは大阪の高石市ですが、転勤族だったので、その後大阪を離れてしまって。大阪を拠点に音楽活動をさせていただいていたわけではないので、ちょっと恐縮だなと…。大学を出てからはいずみシンフォニエッタ大阪さんや、去年は日本センチュリー交響楽団さんの「センチュリー豊中名曲シリーズ」に出させていただいて、「ギター協奏曲」という曲を書かせていただきまして、こんなふうに賞をいただけて嬉しかったです。大阪では、自分の中では大きい作品を発表させていただいていました。

坂東さんからご覧になっての大阪は、どんな印象ですか？

場所によって全然違うなという感じもするのですが、万博記念公園が好きです。公園内に鉄鋼館がありますが、今は記念館みたいになっていますよね。あそこは現代音楽のメッカみたいなところで、すごく重要な場所なんです。今でこそサラウンドスピーカーは映画館とかにも普通にあるし、IMAX シアターやドルビーシネマみたいな形でみんな知っているけれども、鉄鋼館は当時から先駆的なことをやっていたんですよね。万博当時、音楽のために作られた立体のスピーカーのあるホールで、ヤニス・クセナキスとか、武満徹さんとか、錚々たる人たちが毎日コンサートをやっている。しかも当時は若手の音楽家なんですよ。重鎮じゃない。70年代当時の若手で今は大重鎮になっている人たちの名前がいっぱい書いてあって、それが面白いし、そういうのも今はないなあって。当時は楽しかったんだろうな、勢いがあつたんだろうなとも思って、好きだなあと思いますね。……大阪の印象というか、大阪の好きな場所になっていますが(笑)。あそこでいつかコンサートをしてみたいです。

では、ご経歴をお伺いします。坂東さんはお子様の頃から作曲をされていたと聞いたのですが…。

そうですね。現代音楽ではないですけど、ピアノ教室で作曲のちょっとしたレッスンがあつたんですよ。そのカリキュラムの中で作曲をやっていました。

その頃から作曲家を志望されていたんですか？

全然そんなことはなくて。途中ではめられそうになって、作曲家になったという感じです(笑)。

はめられそうになったとは!?

ピアノをやっていましたが、ピアノは人口が多いので、毎年すごい人数のピアニストが音大という組織の中にいるんですね。僕はピアノ1本で食っていけるだけうまいのかといたら、そんなこともなく。たまたま「作曲をやってみたら？」みたいなことを言った先生がいらっやって、そしたら周りが盛り上がっちゃって、いつの間にか作曲家になっていたという感じですね。

そうなんですね。ご自身の中で「作曲家」だという意識はいつ芽生えたのでしょうか？

気づいたら作曲家になっていたという感じなので、いつからというわけでもないのかな。要は「今、生きている作曲家」ということだと思うんですね。作曲にもいろいろあって、たとえばソングライターといって歌ものを書くことも作曲だし、トラックメイキングやビートミュージックを作るのも作曲です。そんな中で、僕がやってきた作曲という行為は、西洋音楽ベースの楽譜を書いて、それを演奏者の人に渡して、どうリアリゼーション(現実化)してもらおうかというもの。僕は音楽を書く側という感じです。

楽譜を演奏家にお渡しして演奏してもらう時、ご自身の中で完成した音と一緒にあるべきなのか、離れていいのか…。

それはいろんなレベルがあって、スタイルや作品にもよって、現代音楽には「ここで即興しろ」みたいな指定が書かれている作品もあります。だけど、僕の場合はそういうことは少ないです。ある程度、楽譜に沿った解釈をするのがルールみたいな感じになっていますね。

僕の音楽では、ジャズみたいに「ここだけサックスはアドリブしてください」みたいなスタイルではなくて。でも、もっと高い次元に行くと、「こういうリアリゼーションもあるんだ」みたいな、そういうこともあります。それはもちろん、自分が欲していた表現——ここまでは守ってほしいといったものの上に出てくるものであって。そういうときは、すごく幸せな瞬間だなと思いますね。

作曲家と演奏家の方は、どんな関係なんでしょうか？

たとえばオーケストラだと、大人数が集まって、短い時間で集中してリハーサルをして、そして演奏会となると、その時間内に楽曲を仕上げなければいけないので、わりと挨拶で終わっちゃうことはあります。ソロの曲の場合は、「リサイタルの曲を書いてほしい」という依頼をもらって書くことが多いので、そういったコミッションワークだと、その人と密なコラボレーションは大事になってくるという感じですね。

## 坂東祐大を構成する3つの音楽

坂東さんのお仕事は、現代音楽の作曲と、映画など映像の音楽と、アレンジの3つが代表されると思いますが、この3つは坂東さんの中で一直線につながっているのか、それともバラバラにあるのか…。



バラバラな感じですかね。映画とか映像の音楽は、半分楽しみみたいなのがあって(笑)。ヨーロッパみたいにユニオンとかがないので、日本の作曲家は昔からそういうものが食い扶持だったんですよね。大御所も昔からそういうことを食い扶持にやっていたところがあります。

でも、ゆるやかにつながっているかなとも思います。そのつながりを表現するのに、最近はファッションショーが近いかなと思って。たとえばパリコレのような大きなコレクションに出す洋服って、奇抜なデザインで、誰も見たことがないというのが求められるじゃないですか。でも、そのブランドのお店に行くと、もう少し着られる服を置いていますよね。サブラインみたいな形で。そんなふうに分け方の作曲とフィルムミュージックは、コレクションとサブラインという分け方が近いのかなとも思います。車でもありますよね。コンセプトモデルはあるけど、量産されるときにはもうちょっと手に取りやすいデザインや工程になっているとか。

ちょっと自分の生活に降りてくる感じですね。

そうですね、フィルムミュージックはもうちょっと生活ベースになるみたいな感じです。そうではあるけれども、フィルムミュージックに関してやりたいことは一つで、演出がしたいだけなんです。音楽による映像の演出。まだまだできることがあると、いろいろ面白いことをやっているという感じです。趣味みたいな。

アレンジは正直よくわかりません(笑)。自分では全然、アレンジは向いていないと思っています。本当

に向いていない。わかんないんですよね、アレンジは。ツボがわからないです。專業の方がいらっしゃるじゃないですか。職業アレンジャーの方のほうが絶対うまいですよ。

依頼される方は、専門でされている方にはないものを坂東さんに求めていらっしゃるのだと思いますが…。

だとしたら光栄ですけど、たまたま呼んでくださっても「僕で良いなら…」みたいな、そんな感じです。

現代音楽を作曲される際、坂東さんは何を大事にされていますか？

現代音楽家もいろんな方がいらっしゃるのですが、一概に言いづらいジャンルではあるのですが、僕はコンセプトと、リアリゼーションという音に落とし込む作業の2層があるかなと思っています。そのコンセプトを考えるのがすごく難しい。ただ単にコンセプトを考えればいいわけじゃなくて、「今、この社会にどういふものを投げかけたらいいいのか」と考えるのが一つの使命というか、責任なのかなという感じがしますね。簡単に消費されるようなものじゃなく、深いところで「これは何なのか」と思ってくれるようなコンセプトを探すことがすごく難しいですし、逆に面白いとも思っています。

コンセプトを探される時、どういうことに着目されていますか？

作品にもよりますが、特にコロナ禍に考えていたのは、音楽の脱構築ということです。「普通はこうだ」と信じられてきたものを、一回解体してみようぐらいの意味ですが、音楽としてそういう役割ができるとすごく面白いと思うんですよね。「普通、こうだよね？」みたいなことを一回、全部取っ払ってみても面白いだろうと。あと、毒気みたいなもの。テレビとかでは流せないような毒気を音楽で表現できると思っているの、いかに後味を残すかみたいなことを考えていたりします。

確かに音楽の毒はわかりにくいですね。

音楽における毒は、すごく抽象的なものだと思うんです。音楽って最初から善みみたいな印象があるけど、絶対そんなことはなくて。いくらでも悪用できるし、悪用してきた例も歴史的にたくさんあるわけで。もちろんそれだけではないのですが、そういうことを発信し続けたいなとは思っています。ただ、現代音楽は一般的な認知度が低いジャンルなので、僕だけじゃなくて、いろんな素晴らしい作曲の方がいらっしゃるの、広く現代音楽を聴いてもらえたら嬉しいなと常々思っています。

その一方で、「現代音楽はわかりやすいですよ」と簡単には言いたくないという思いもあります。わかりやすい音楽の方が良いみたいなことでもないと思っていて。難しい作曲、ややこしい音楽をしている人たちが世の中にいるんだということを知ってほしいですね。それは僕がどうこうというよりも、作曲

という行為がもうちょっと認知されてほしいなという思いです。

## **大阪が誇る文化、文楽が大好き！**

最後に、坂東さんは大阪市の何に「咲くやこの花賞」を贈りたいと思われますか？

二つあって、一つは「いずみシンフォニエッタ」さん。大阪での現代音楽において、とても大事な軸を担っていらっしゃる。

もう一つは国立文楽劇場です。文楽、好きなんですよ。日本の古典音楽に興味を持って、もうちょっと知りたいなと思ってふらっと文楽を見に行ったら、めちゃくちゃ面白くて。僕はどうしても音楽的に聞いちゃうので、三味線だけでなく、太夫さんも音楽的に聞くのですが、これが面白い。ご縁があって去年から竹本織太夫さんと交流も生まれました。文楽は大阪が誇るべき文化だと思うので、いろんな人に見てもらいたいと思っています。